

神奈川県立子ども医療センターオレンジクラブ

ボランティアニュース



Vol. 197 2020年3月号

発行 神奈川県立子ども医療センター オレンジクラブ事務局

編集責任者 ボランティアコーディネーター 加藤 悦興

〒232-8555 横浜市区南六ツ川 2-138-4 Tel. 045-711-2351 (代表)

ホームページ <https://orangeclub.kcmcvolunteer.com>

e-mail kcmcvolunteer@kanagawa-pho.jp

早くいつもの病院になることを願って

ボランティアコーディネーター 加藤悦興

毎日、新型コロナウイルスに関する報道があり、日々の生活にも変化を余儀なくされています。センターでも、来院者には正面玄関で健康チェックしてから中に入っていたり、水際防止策を取っています。入院している方を守る感染防止対策です。

ボランティアは、2月から病棟活動や総合待合でのイベントは自粛しています。毎週活動していたお話し会と本の貸し出しの「ぽぼんた」の皆さんも、総合待合でお子さんからリクエストをもらってピアノ演奏している高野さんもお休みしています。

今、活動しているのが、外来ボランティアの皆さんと重心施設の作業の皆さん、他に臨時で必要なことに対応している方々です。ボランティア室で健康チェックをして、活動開始します。母性病棟の洗濯のご依頼に対応している外来ボランティアさんは「こういう時だから洗濯の依頼も多いです。」と話していました。

今回、病院の方針（外部から入院患者さんや外来患者さんを守る）を受けてボランティア活動についても検討しました。前述の通り、ボランティア活動時の健康チェックや病棟活動の中止、そして、さらに大切なことは、ボランティアさんたちをリスクから守ることです。遠方から公共交通機関を乗り継い

でくる方には、ボランティアさん自身及び患者さんへのリスクを考慮し自粛していただいたり、ご自分の健康状況から自粛の申し出を頂いたりしました。

そもそも、ボランティアさんは、困ったときに何かできないかという思いがあつて活動されています。「きょうだい預かり」活動は、中止していますが、おもちゃの清掃や、緊急的な対応ができるように手はずを整えています。

今は入院している方の安全が第一です。早い終息を願い、患者様や御家族の皆様、職員の皆様、そしてボランティアの皆様も、一緒に取り組んで、この状況を乗り切りましょう。

ボランティアの皆さんは、病院に来ていなくても、「3月お休みなので〜を作ってきます。」

と話し、折り紙作品や5月飾りやバザー作品、ボランティア室必要物品などを作成しています。

こどもたちの療養環境をいつも考えているボランティアの方々にとつても、気掛かりになることばかりでしょう。こどもたちが『いつもと違う』と感じる不安な気持ちを持つていると思います。感染対策を講じながら、その対応への手がかりが出せることを願っています。

闘病中でも、笑顔やおしゃべりがいっぱいある「いつもの病院」になることを願わずにはいられません。

テレビで閉鎖空間の危険性を話していました。お天気がいい時は、屋上に行ってみることをお勧めします。



神奈川県立こども医療センター (KCMC) と我が家のこと

鳥居智満子

初めて KCMC を訪れたのは、第一子が手術を受ける必要があるためでした。まだ古い建物で、今事務局が置かれているところに内科がありましました。外科や放射線科などの診療科も狭いスペースに置かれ、今のようにベビーカーを広げたまま持ち込むことはご法度…という状況でした。

この頃はオレンジクラブという形でのボランティアは無く、お志ある方が担ってくださったように思います。

暗い建物内は、こどもにとって行きたくない場所でした。(勿論、病院ですら行きたくないとは思いますが。建物の雰囲気怖かった様です。)

そんな時、ちよつとした飾りやこどもの好きなキヤラクターの絵が、こどもをどんなにか怖い空間から救ってくれたことでしょう。

第一子は社会人となりましたが、末子はまだ小学生。あれからずつとお世話になっております。救急車で運ばれることもありました。

入院、手術もありました。現在も通院中です。新棟ができてオレンジクラブの活動が盛んになり、方々でボランティアの一人一人の働きをより認識するようになりました。

休日に額に入った手拭いを季節に合わせて替えてくださる方、キレイなお花。本の読み聞かせ。ミニコンサートなど数えきれないほどの見えるところ、見えないところでの働きに感謝しています。

支えていてくださる皆さま
心よりありがとうございます。

そつと見守り、そつと寄り添う

あれからどれくらい経ったのだろう。

小さな小さな種が蒔かれ、芽を出し、根を張り、青々とした葉が生い茂る。

時に木陰。時に雨宿り。その葉は、通り良き風を知らせてくれる。

私は、ボランティアの働きをこう捉えている。見えるところ見えざるところ。確かに多くの存在が、私を支えてくれている。

あれからどれくらいこの地に足を運んだのだろう。泣いた。笑った。悩んだ。そして受け入れた。そんな時、そつと見守り、そつと寄り添うボランティアの存在に励まされる。毎日どこかで、誰かを思つて作業する姿。

私は1人のようで1人じゃない。
そつと見守り、そつと寄り添う。

いつか私もそつと見守り、そつと寄り添う存在になれる日が来るだろうか。

2

今はまだ、目の前の小さな存在に、心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くしていこう。

そつと見守り、そつと寄り添う存在に支えられながら。

鳥居智満子 (とみこ)

*患者図書ボランティアの村田さんから長年通院されている鳥居智満子様の事をお聞きしました。今回鳥居様からメッセージを頂きましたのでご紹介いたしました。

ぽぽんたトピック⑳

キクちゃん

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は収まる
心配がない。中国で発症した時点では、まだまだ
身近に思えず恐ろしさも無かったが、あつという
間に世界中に拡散した。感染速度の速さに驚きと
怖さで身が縮む思いだ。

ぽぽんたの活動は、病院の子ども達に直接触れる
ので、2月19日(水)から3月中は活動無しと、
リーダーからメンバー全員に急ぎよ連絡がはい
った。それぞれメンバーは、幼稚園、保育園、小
学校、図書館、公民館 等々でおはなし会を定期
的に行っているが、活動無しになっているのだろ
うか？

きくちゃんは辻堂の小学校で毎週火曜日におは
なし会をしている。

今日もJR戸塚から8時5分の東海道線に乗った
が、乗客の混み具合が少ない。

向かい側の東京方面ホームは、いつも溢れそうな
乗客なのに、やはり少ない。

時差通勤や自宅業務に切り替えたのかもしれない。
新型コロナウィルス感染症の収束が待ち遠しい。



重心施設の活動より

「どんぐりさん」こと片山恵美子

ボランティアなので、邪魔にならないように気
をつかう私に職員さんは毎回「お願いします。」
「ありがとうございます。」と声をかけてくれ
ます。私は子どもたちに「遊んでくれてありが
う！」と言って終わります。

他の病棟と違い、この子どもたちはお話しが
苦手なので、私に不快感があっても表情に出すこ
とや口にするのはしません。「いいんですか？」
と少しづつ近づきながら楽器の音色を奏で、打楽
器を手足に弾ませたり歌いながら布を振ったり
します。年齢の高い女の子がいます。彼女はわた
しのお話が入りのようで職員さんが私に
近づけてくれます。彼女の口の動きをまねし私の
声を被せると喜んで、ますます顔が近づきます。
月1度の活動ですが

10年の活動で関係が築けたようです。
2011年に病児や支援級、養護学校での私の活
動に対し財団法人ソロプチミスト日本財団から
社会人ボランティア賞を頂きました。その副賞金
を元に少しずつ貯蓄をし、昨年9月から製作さ
れた手回しオルガンは12月30日に届きまし
た。年明けの2月1日(土)にイベントの機会を
頂き、職員の吉野さん(保育士で音楽療法士)と
一緒に音楽遊びをしました。この子どもたちがい
て頂いた賞をここで還元することが出来ました。

たった一人の小さなボランティアですが誰かが
見て下さり誰かが声にし、誰かが推してくれ
る・・・不思議な喜びを感じています。今後は
このオルガンで在宅支援できないかと考えてい
ます。



写真上
片山さんと手押しオ
ルゴール
写真左
吉野さんと一緒



「全国ボランティアコーディネーター研究集会に参加して」

シヤボン玉 森 智恵子

去る2月22日(土)全国ボランティアコーディネーター研究集会に参加してきました。

午前中は「多様性を新たな共生社会の力に」のテーマでデンマーク・埼玉・東京で活躍しているパネリストの方達の実践報告がありました。3人の活動場所・内容はそれぞれ異なりますが、目の前にいる人との関わり方の根本は同じで、大切にしていることは対話する事。向かい合う相手の立場や考え方を尊重し、理解しあう事で信頼関係が築ける。そのうえで話し合い、問題に向かい、意見の相違があってもより良い答えを導き出す。対話する事で多文化共生を可能にし、地域での活動を円滑にしていく事ができる。会話ではなく対話の重要性を改めて認識できる内容でした。

午後の分科会では「病院・小児医療施設のボランティア活動を生み出すボランティアコーディネーターの役割」に参加。全国のボランティアコーディネーターの方達が集まる中、神奈川県立保健福祉大学野中教授の全国の病院のボランティアコーディネーターの活動状況報告とコーディネーターの加藤さんをはじめ東京・宮城・愛知・埼玉での事例発表があり、その後活発な話し合いがありました。コーディネーターの数は少ないという現状がありますが、この様な会を開くことで情

報共有ができ他の病院での活動を知ることによって夫の仕方や違う視点がある事に気づき自分達の活動に還元できます。コーディネーターの社会的認知を進める為にこれからも情報共有の場を持つ必要性を確認して終了しました。

ヨシタケシンスケさんに頂きましたイラストです。ぜひいたくなスペースになりました。

